

更級日記の橋の記述をめぐって

——断橋の風景——

一

更級日記において、特に東海道上京の旅の記で、橋や渡りについての記述が多く目につく。東海道は実際に多くの河川や湖沼を越えて行く道であるから当然とも言えようが、その橋や渡りの描き方には奇妙なことが指摘できる。すなわち、道中の橋がごとく断たれているのである。事は上京の旅に限るわけではない。上京以降の物語での記においてもやはり、橋を渡るといふことが描かれない。この日記においては橋はことごとく落ちてゐるか、さもなければ失われているのである。実際の作者の旅において、史実として橋の有無を確認するのは困難な部分が多いのだが、歴史的事実はともあれ、この作品は客観的事実の再現を目指して書かれたわけではないのである。要は、作者の心の真実として、そしてまた記憶の中の風景として、橋は全て落ちていなければならなかったのである。以下、この日記の橋をめぐる描写について確認し、そのことと作者の信仰の問題とを関連づけて検討してみたい。

二

東海道上洛の旅は、当然の如く数多くの川や湖沼を渡って行くものであった。途上で実際に橋のことが記されているのは、作品の道順によって挙げれば次のようである。

①昔、下総の国に、まのてうといふ人住みけり。ひきぬのを千むら万むら織らせ、晒させけるが家の跡とて、深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、川の中に四つ立てり。人々歌よむを聞きて、心のうちに、

(注一)

朽ちもせぬこの川柱のこらずは昔のあとをいかで知らまし

②その夜、勢多の橋のもとに、この宮をすゑたてまつりて、勢多の橋を一間ばかりこぼちて、それを飛び越えて、この宮をかき負ひたてまつりて、七日七夜といふに、武蔵の国にいきつきにけり。

③浜名の橋に着いたり。浜名の橋、下りし時は黒木をわたしたりし、このたびは、あとだに見えねば舟にて渡る。入江にわたりし橋なり。

元吉 進

④八橋は名のみして、橋のかたもなく、なにの見どころもなし。

⑤勢多の橋みなくづれて渡りわづらふ。

なお、上京以後の日記では数々の物詣で等の旅を記すが、そこには橋に関する描写は見られない。上記①～⑤についていくつか確認しておきたい。

①は「まものてう」(まもの長者)の屋敷跡の描写である。一行は深い川を舟で渡っており、直接的にはここは橋が描かれているわけではない。けれども、「大きな柱、川の中に四つ立てり」という光景に接して詠まれた「朽ちもせぬ」歌は、秋山虔氏が指摘されるように「葦間より見ゆる長柄の橋柱昔の跡のしるべなりけり」(拾遺集、雑上、藤原清正)や「朽ちもせぬ長柄の橋の橋柱ひさしきことの見えもするかな」(後拾遺集、賀、平兼盛)等の歌と着想を同じくするものと考えられる。「川柱」という特異な語で表現しているものは、「まもの長者」の四脚門の門柱の名残であろうが、作者はそれを歌枕長柄の橋の橋柱と重ね合わせにして描いているのであって、川の中の四本の柱は残された橋柱、いわば失われた橋の幻影なのであろう。難波の歌枕長柄の橋は諸書に引かれ著名な存在である。古今集仮名序に「長柄の橋もつくるなり」と書かれるように、古いものの喩えに用いられるのが主たる用例だが、加えて、「壊れてもあはれたとへてなぐさめし長柄の橋も今は聞えず」(興風集)や「我ばかり長柄の橋は朽ちにけり難波のことも古るる悲しさ」(後拾遺集、雑四、赤染衛門)などのように「橋が朽ちてしまったことをよんでいるのであるが、橋そのものは朽ちても、橋柱だけが残っている景もよくよまれた」という。(注三)「まもの長者」の屋敷跡という川中の柱の情景は、今は絶えてしまった橋の柱として作者の心に焼き付けられたと考えられるだろう。

②は、作者が耳にした武蔵国の竹芝伝説で、その中に三例「勢多の橋」が見える。それも近接するところに書かれていて、作者には強く印象付けられた地名だったのであろう。伝説中の勢多の橋は竹芝の男と皇女が東に下る際には架かっていたのだが、男が橋板を引き外したためにいわば断たれた橋となり、追っ手はそこを渡るに渡れないということになるのであった。後日、上京の旅で作者自身の体験として橋がすっかり壊れていて、渡るのに難儀したと記すのと響き合う描写である。

③は「浜名の橋」で、枕草子の「橋は」の段にもその名が挙げられる。浜名湖から流れ出て海に入る浜名川に渡された橋であり、遠江国の有名な歌枕であった。日本三代実録の元慶八年(八八四)九月朔日の記事に「遠江国浜名橋長五十六丈、広一丈三尺、高一丈六尺、貞観四年修造。歴廿余年。既以破壊。勅給彼国正税稲一万二千六百四十束改作焉」とあるように、貞観四年(八六二)に修造されたものの二十余年経って破壊が進み、元慶八年に架けかえられている。重之集(注四)には、

さねかたの君のともに、みちのくににくだるに、いつしかはまなの
のはしわたらんとおもふに、はやくはしはやけにけり

みづのうへのはまなのはしもやけにけりうちけつなみやよりござりけむ(九四)とあって、浜名の橋の焼失が詠まれている。陸奥守に左遷された藤原実方が陸奥に下ったのは長徳元年(九九五)であるが、それに重之も随行しており、浜名の橋の歌はその際のものであるから、長徳の頃には橋は焼け落ちて無かった。一条天皇の頃の人とされる増基法師も、

はまなのはしのもとにて

人しれずはまなのはしのうちわたし歎きぞわたるいくよなきよを

(増基法師集 九三)

はしのこぼれたるを

中絶えてわたしもはてぬものゆゑになにはまなの橋をみせけん

(同、九四)

と、浜名の橋の中絶えを詠んでいる。

一方、中世の紀行をみると、貞応二年(一二三三)四月に東海道を下った海道記の作者は「橋下ノ宿」に泊まり、「橋下ヲ立テ、橋ノ渡ヨリ行ク顧レバ」と橋上からの風景を愛でて(注五)仁治三年(一二四二)八月に都

を出立して鎌倉に下った東関紀行の作者も「湖に渡せる橋を浜名となづく。古き名所也」と書き、美しい景色の橋を渡るのが名残惜しいと詠んでいる。また、弘安二年(二七九)十月、訴訟のため鎌倉に向かった阿仏も「浜名の橋より見渡せば、鷗といふ鳥いと多く飛かひて、水の底へも入る」(十六夜日記)と、橋上の風景を記している。何れも浜名川に架けられた浜名の橋を渡って東(あづま)に下っているのであった。

孝標女が上京の際に浜名の橋を通り過ぎたのは寛仁四年(一〇二〇)であったが、三年前の上総下向時には「下りし時は黒木をわたしたりし」とあるので、日本三代実録にあったような立派な橋ではなく、黒木を渡しただけの簡素な打橋であったが、上京時にはそれすらも無かったのである。歌枕浜名の橋は「堀川百首」には「名」と掛詞にして「今はみな橋柱さへくちはててはまなばかりをききわたるかな」(永縁)と、朽ちたありさまがよまれているというように、「長柄の橋」と同様に焼失したり流失したりしつつも名だけが歌枕として有名であった(注六)とされる。このように、

浜名の橋は破損や架け替えを繰り返したようである。ともあれ、孝標女は上京の旅において浜名の橋を渡らず、舟で越えているのであった。

④の「八橋」も古今集驛旅巻の業平歌や伊勢物語の東下り以来、三河国の歌枕として東海道を往還する旅人の心を捉えて離さなかった。伊勢物語によれば、水流が蜘蛛の脚のように四方八方に分かれて流れている所に八つの橋を架けたことによる名称とする。業平以来、八橋を詠んだ歌は枚挙に遑がないが、

八橋はふみ絶えにしを今さらになにかくもでに思ひみだれむ

(頼政集、四七五)

などのように「くもでに思ふ」(あれこれと物思いで心乱れる)という形で詠まれることが多かった。一方、この歌に「ふみ絶え」とあり、また藤原雅経の歌に、

これもおなじあづまの道にてよみ侍りける歌の中に

みしよりもなほふりにけるわたりかなうきかみかはのぬまのやつはし

(明日香井和歌集、一五五七)

くちにけるけふやつはしをみやこ思ふ心ややがてくもでなるらん

(同、一五五八)

とあるように、「踏み絶える」もの、「古りにける」もの、「朽ちにける」ものというイメージも強かったようである。雅経は鎌倉将軍源実朝と藤原定家ら京の公家との仲立ち役として、都と鎌倉をしばしば行き来した人物であるが、雅経が八橋を通った鎌倉時代半ば頃には、橋は老朽化して落ちてしまっていたようである。一方、海道記では「一両ノ橋ヲ名ケテ八橋ト

云。(中略)橋も同じ橋ナレバ、イクタビ造カヘツラム。(中略)住ワビテ過ル三川ノ八橋ヲ心ユキテモ立カヘラバヤ 此橋ノ上ニ思事ヲ誓テ打渡レバ」と、幾度か造り替えられたであろう橋の上で思いに耽っている。十六夜日記の旅に先立ち、十代半ばの阿仏は養父について遠江国に下ったが、途中、「三河国八橋といふ所を見れば、これも昔にはあらずなりぬるにや、橋もたゞ一つぞ見ゆる。かきつばた多かる所と聞きしかども、あたりの草も皆枯れたる頃なればにや、それかと見ゆる草木もなし」(うたたね)と、伊勢物語に描かれた情景とはうってかわって一本だけ橋が架かっていることを書いている。また、十六夜日記では「八橋にとゞまらんといふ。暗きに、橋も見えずなりぬ。さゝがにの蜘蛛手危うき八橋を夕暮かけて渡りぬる哉」と記して、夕暮れの暗がりの中、橋を渡ったことが描かれる。さらに、正応二年(一二八九)二月に都から東国旅行に旅立った後深草院二条は「八橋といふ所に着きたれども、水行川もなし。橋も見えぬさへ、友もなき心地して、我はなを蜘蛛手に物を思へどもその八橋は跡だにもなし」(注七)(とはすがたり)と、八橋の跡形も無いことを記している。このように、文学作品からは、八橋が時には朽ち、時には絶え、あるいは橋の数も変化しながら、幾度も造り替えられてきたことが窺える。低湿地にあった橋ゆえ、「蜘蛛手危うき八橋」の歌の通り不安定な橋は何度となく流失したことであろう。上田篤氏は日本の橋について「日本で橋をカケルとは、谷や川の両端に物をひっかけるようなかんたんなことを意味し、カケハシとは、まず第一義的には永久橋にたいする仮設橋のことである、といえる。つまり仮橋ということ、これが日本の橋の第一の性格である」(注八)と述べておられるが、古く日本ではヨーロッパや中国のように頑丈で永続する石造りの橋は造られなかった。仮橋は日本の風土に根ざしたものであろう。ともあ

れ、更級日記の作者が八橋を過ぎた時には八橋は跡形もなく崩壊してしまっていたのである。

⑤の「勢多の橋」は②の竹芝伝説に既に見えていた。架橋の年代は不明であるが、日本書紀の壬申の乱にも記され、天智天皇の志賀大津宮の頃には架けられていたという古い歴史を持つ。拾芥抄の「大橋」の項には「山崎、近江勢多、宇治」とあり、また延喜式卷第二十六、主税寮上には「近江国正税、(中略)修理国府料四万束、勢多橋料一万束」、「凡近江国修理勢多橋用途帳、附朝集使毎年進上、備之勘会」とある。大和、山城と東国を結ぶ要衝に立地することから、古来から重要な大橋として朝廷の管理下にあったのである。しかしながら、勢多の橋は幾度か破損したことが史実にみえる。日本三代実録、清和天皇の貞観十一年(八六九)十二月四日条には「近江国勢多橋火」とあり、貞観十八年(八七六)十一月三日条には「近江国勢多橋三間破絶」などの記事が散見される。天災等で破損したり火災によって焼け落ちたこともあり、あるいは日本書紀の壬申の乱の記事のように、交通の要衝ゆえ戦略的に橋を使えなくすることもあったのである。

ところで、歌枕としての勢多(瀬田)の橋は瀬田の長橋とも呼ばれ、

勢多橋

あふみなるせたのながはしはるばるとみちあるきみをききわたるかな

(江帥集、五一九)

のように長いことの喩えとして用いられ、また、

すはうのないしのもとへつかはす

あふさかをえこそわすれねとしふれどせたのながはしいたくつるまで

(同、四五〇)

せたのはし

ひつぎものたえずそなふるあづまぢのせたのながはし音もどろに

(兼盛集、一〇五)

堀川院御時、百首歌たてまつりけるに 前中納言匡房

楨のいたも苔むすばかり成りにけりいく世へぬらむせたの長橋

(新古今集、卷十七、一六五六)

などのように、長い年月を経て、苔むし朽ちるところがあっても架かり続ける不変の橋、というイメージもあったのである。勿論現実には瀬田の橋は破損することもあったのだから、例えば

せたの橋こぼれたるほどに、いし山にまうづ、かはのあなたにほととぎすのなくを

ゆくべきをはしこぼれたるほととぎすかはらのなたに鳴きわたらなん

(大江嘉言集、一六八)

のような歌もある。この歌が詠まれた年次は不明だが、大江嘉言は寛弘七年(一〇一〇)に没した人物であるから、更級日記の記述となにがしか関連も考えられる。しかし、瀬田の橋の破損を歌った例は極めて少なく、この歌は例外的である。日記等に目を転じると、蜻蛉日記中巻には、石山詣での帰途に「瀬田の橋のもとゆきかかるほどにぞ、ほのぼのと明けゆく。千鳥うち翔りつつ飛びちがふ。もののはれに悲しきこと、さらに数なし」とあって、道綱母が石山寺に詣でた天禄元年(九七〇)七月、瀬田の橋は

変わらず架かっていた。また、義経記にも「逢坂の関うち越えて大津の浜をも通りつゝ、瀬田の唐橋うち渡り、鏡の宿に著き給ふ」と描かれる。中

(注九)

世の紀行では、海道記には「勢多橋ノ此方ニ暫ク留テ浅増クシテ行。今日明日トモシラヌ老人ヲ独リ思ヲキテユケバ、思ヲク人ニアフミノ契アラバ今帰コン勢多ノナカミチ」とあって、都に残した老母との再会のために、勢多の長橋の真ん中を渡ることを心に期している。帰路にも当然勢多の橋は変わらざるといふ思いが読み取れよう。東関紀行にも「明ぼの空になりて、瀬田の長橋打渡るほどに、湖はるかにはあらはれて」と記される。こうしてみると、歌枕瀬田の橋は、破損して落ちていた例が無いわけではないが、当然のようにそこに架かっている、というありかたが一般的と思われる。史実はともかく、朽ちるとも変わらないものとして、瀬田川に長々と橋が渡っているというのが、文学上の瀬田の橋のイメージなのであろう。文学の伝統では、瀬田の橋は落ちることがないのである。

ここで視点を変えて、橋と同様に川や湖沼や海辺を越える「渡り」について確認しておきたい。更級日記は、上京の旅も含め物詣での記などに「渡り」の記事がいくつかみられる。それらを記載順に挙げると以下のようになる。上京の旅においては、

- ⑥ 松里のわたりの津にとまりて、夜ひとよ、舟にてかつがつ物などわたす。
- ⑦ あすだ川といふ、在五中将の「いざこと問はむ」とよみけるわたりなり。(中略) 舟にて渡りぬれば、相模の国になりぬ。
- ⑧ 田子の浦は浪たかくて舟にて漕ぎめぐる。
- ⑨ 大井川といふ渡りあり。
- ⑩ 富士川といふは、富士の山より落ちたる水なり。

⑩天ちうといふ川のつらに、仮屋造り設けたり(中略)その渡りして浜名の橋に着いたり。

⑪三河と尾張となるしかすがのわたり、げに思ひわづらひぬべくをかし。

⑫尾張の国、鳴海の浦を過ぐるに、夕汐ただみちにみちて、(中略)汐みちきなば、ここをも過ぎじと、あるかぎり走りまどひ過ぎぬ。

⑬美濃の国になる境に、墨俣といふ渡りして、野がみといふ所に着きぬ。

実際の地理的位置関係はともかく、主だった河川と渡りが忠実に辿られている。また、上京以後の記事においては物語での旅のなかで以下の渡りが挙げられる。

⑭松里のわたりの月かげあはれに見し乳母も、三月ついたちになくなりぬ。

(⑥の思い出)

⑮宇治の渡りにいき着きぬ。そこにもなほしもこなたさまに渡りする者ども立ちこみたれば、舟のかちとりたるをのことも、(中略)からうじて渡りて、

⑯いみじう風の吹く日、宇治の渡りをするに、網代いと近うこぎよりたり。

⑰また初瀬に詣つれば、(中略)初瀬川わたるに、

これらのうち、⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮は舟を使ったことが記されている。また⑯は「走りまどひ過ぎぬ」とあるように海辺を走り渡っている。⑯⑰⑱は再度の長谷寺詣でであるが、初瀬の際にも「初瀬川などうち過ぎて」とあるのみで具体的な行程は明確でない。源氏物語玉鬘巻における玉鬘一行の長谷参籠には「初瀬川」が二例見え、蜻蛉日記の再度の参籠にも初瀬川の描写はあるのだが、初瀬川を渡る場面はなく、詳細は不明というしかない。「こ

もりくの泊瀬の川に船浮けて我が行く川の川隈の」(万葉集、巻一、七九)のように舟の利用も考えられる。川を渡る場所としての「渡り」は、たとえば源氏物語には二例しか見えない。「御涙の川に、あすの渡りもおぼえ給はず」(早蕨巻)とあるのは中の君の「明日の京への」転居の意に、「涙の川」の縁語で渡船場の意をひびかす^(注十)ものだし、「泉川のわたり」(宿木巻)とあるのは浮舟の女房のことばで、木津川の渡し場のことを言っている。この「泉川」に関しては蜻蛉日記にも描かれる。再度の初瀬寺参籠の帰路、「泉川、水まさりたり」というので、舟で渡河してから陸行する通常のルートに対し、作者達は腕のいい船頭を頼んで宇治まで下っている。源氏物語にはこの他にも一例「渡し守」の語が見える。「さいつころ、渡し守が孫の童、棹さしはづしてをち入り侍りにける」(浮舟巻)とある「渡し守」は、宇治の人々の語りにあるから宇治の渡りのそれである。土佐日記にも、入京に際して「桂川、月の明きにぞ渡る」とあるが、後の歌に「桂川袖を漬ても渡りぬるかな」とあるから、一行は橋ではなく桂川を徒渉したのであった。枕草子には「淀の渡りといふものをせしかば、舟に車をかきすゑて行くに」^(注十一)「(卯月のつごもり方に)」とあって、淀の渡船の様子が描かれている。枕草子で「わたりは」と「橋は」とをそれぞれ別の段に仕立てていることから、「渡り」は橋ではなく舟、あるいは徒渉での渡河を指すのが一般であるとみてよいように思われる。

そうすると、更級日記の前掲⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮の「渡り」は特に「舟にて」と明記してはいないが、舟か徒渉であったと考えて差し支えないであろう。とすれば、この作品の中で橋について記しているのは、浜名の橋、八橋、勢多の橋の三つのみということになる。「まの長者」の「川柱」に橋柱の幻影を見たとして、それを入れてもわずかに四本の橋しかないのである。

しかもそれは、すべて上京の旅の記のなかにおいてである。ここで問題なのは、橋が四本しか書かれていない、ということではない。そうではなくて、その橋の描かれ方が特異なのである。つまり、名は挙げられても橋はどれもみな架かっていないのである。上総に下る際には渡った浜名の橋も上京時には落ちていたのだし、八橋は橋の跡さえもなくなっていた。勢多の橋も完全に崩落しており、「まの長者」屋敷跡には幻の橋柱だけが空しく川中に立っていた、と記すのである。ということは、上洛以降の記事も含めて、この更級日記で作者はまったく橋というものを踏み渡っていないことになる。東へ下向時に渡った黒木の浜名の橋は唯一の例外であり、それは別の機会に検討したい。ここにあるのは、断ち切られ、崩落した橋の跡なのであって、つまり断橋という風景がこの作品の橋をめぐる描写ということになりそうである。

現実には、これらの橋は破損したり、焼け落ちたり、改修されたりを繰り返したわけだから、たまたま作者が上京した時には橋が架かっていなかったのだとも説明できるだろう。しかし、この更級日記は客観的事実の記録とか再現を目指すものではない。例えば「下総の国のいかだといふ所」で雨に降り込められたことを語るなかに描かれた「野中に、丘だちたる所に、ただ木ぞ三つ立てる」というような風景がある。一読何の意味もないような、あるいは読者には謎めいた風景だが、こうした風景の意味については、「作者の記憶の中にしか存在し得ないかけがえのない事実として、切実な意味を持ち得た」のだとか、「この丘の上に立つ二本の木の印象が、後年まで作者の心の中に屹立する鮮明な映像として（中略）全体の記憶の鍵となっている」という指摘がなされている。上京の旅の記に描かれた風景は、単なる客観的事実の描写ではなく、作者の心の投影であり、象徴と

しての選り取られた、創造された心象風景なのであった。とすれば、先述の橋の風景もまた、実際に作者が見た生の風景の描写というよりも、作者の心のなにかを象徴させ、心情を塗り込めた心の風景であろう。橋がすべて断たれている、という構図は、おそらく執筆時の作者の心を投影した風景なのである。

三

それでは、橋が断たれているという風景に作者が投影した心情とはどのようなものであったのだろうか。一つは、東国への意識が挙げられるだろう。日記全体の四分の一の分量を費やして作者は上総からの上洛の旅を記した。それはこの旅が人生に大きな意味を持ったからであろう。ここでは、上総で仏に祈るほどに焦がれた物語のことや、物語の舞台である雅な都のことはまったく影を潜め、東国を去ることの哀感の情が色濃く描かれる。上京以後も折にふれて東国や上総のことを思い起こしている。懐かしく忘れがたいこの東国については、東国回帰意識ということが指摘されてきた。秋山虔氏は「空間的に時間的に茫々の彼方に遠ざかった、その原郷へと帰還したい作者が、言葉を織り紡ぐ作業によって、その通路を敷設したのがこの旅の記」であり、それは「東国から京への上京の道程を単に語ったのではなく、両者を架橋することによって」晩年の作者自身の人生を確認する営みなのだとされる。^(注十四) 工藤進思郎氏も、東国の風景は「今や時間的にも空間的にも遠く隔てられてしまった東国との別離意識を、強く掻き立てられる懐しい思い出」であり、「東国は、ますます懐しく思い出される「ふるさと」だった」として、「東国故郷意識」を指摘されている。^(注十五)

五十歳代半ばでこの日記をしたためている作者にとって、物語への憧れ、恋への夢、都への期待感にのみ生きられた上総での生活は、時空のはるか彼方に過ぎ去ってしまったのであり、二度とは帰らぬ思い出であった。日記執筆にあたって、自己の現在を見つめ、心の原郷東国でのことを思い出す作者にとって、そこは物語への志向を育んだ所である。信仰に光明を見出そうとする現在の作者にとっては、物語耽読によって信心の契機を逸した過去があるのである。そうした面からすれば、東国は懐かしくとも帰ることのできぬ場所であり時間であるとの確認の意を込めて、上洛の道中の橋をすべて断ち落とし、いわば退路を断ったということではなかっただろうか。断橋は、信仰に一縷の望みを求める作者の、東国への訣別を表現する象徴の風景であったように思われる。

次に、橋が断たれている、という情景のもう一つの意味を探ってみよう。それは作者の信仰心と関わっているように思われる。少女時代の上総で物語に目覚め、上京してある限りの物語を読みたいという願望を抱いた作者は、薬師仏を造って一心に祈ったのだった。都では物語に耽溺し、さらには深い信仰心に支えられたとも思えない物語でにいそむ生活で、神仏の幾度かの示現をも気にとめず信仰の道から遠ざかり、その結果、五十一歳の晩年になって頼む夫に先立たれ、「昔より、よしなき物語、歌のことをのみにしめ、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし」と悔恨の情を述べるに至るのであった。この述懐は「かうのみ心に物のかなふ方なうてやみぬる人なれば、功德も作らずなどしてただよふ」という自己の人生の総括めいた言葉で締め括られる。一見閉じられたかに見えた日記は、この後で、夫の死に先立つ三年前に見た夢のことが述べられる。「天喜三年十月十三日の夜の夢に、ゐたる所の家

のつまの庭に、阿弥陀仏立ちたまへり」と、阿弥陀来迎の夢が語られる。物恐ろしくなってきたじろぐ作者に仏は「さは、このたびはかへりて、後に迎へに来む」と立ち去ったという。この夢は「頼むこと一つ」なのであり、「この夢ばかりぞ後の頼みとしける」と記すように、その後の信仰心に大きな一石を投じた夢であった。この記事の後に「姨捨」の歌、老残の心境が語られ、久しい友人である尼との遣り取りの最後に、尼の「世のつねの宿のよもぎを思ひやれそむきはてる庭の草むら」という、作者の心浅さ、信仰心の欠如をたしなめるかの如き歌で日記は閉じられる。

阿弥陀来迎の夢を頼みとし、夫の死を契機に信仰の道に生きるはずだった作者はしかし、その後も「功德も作らず」に「ただよふ」人生を送っている。先述の尼の歌はそうした作者の心を見透かして降された鉄槌のような響きである。阿弥陀仏はまた迎えに来ようとおっしゃった。それを頼みとする一方、実は作者の心には浄土は遙かに遠く、来迎も困難だということがあったのではないか。

久保朝孝氏は、浄瑠璃寺や法成寺など平安中期の浄土寺院の配置を検討され、池をはさんで東に薬師仏、西に阿弥陀仏を配する意味を「娑婆世界を中央におき、東に薬師の浄瑠璃世界（浄土）、西に阿弥陀の極楽世界（浄土）が配置され、薬師による西への遣送、阿弥陀による西からの来迎という、極楽往生を機縁とする機能としての照応関係」を認めたとうえで、さらに更級日記の「作品冒頭部に、作者を〈西〉へ遣送する薬師仏が記され、同じく末尾部に作者を〈西〉から来迎する阿弥陀仏が記される」ことに、「作者の明確な意図＝構想性」を指摘しておられる。^(注1)だとすれば、日記巻末の阿弥陀来迎の夢は、作者自身の願望であるところの浄土往生を約束してくれるはずのものである。けれども阿弥陀仏は立ち去ったのであった。

「不安定な心境を生きる自分のような者には極楽往生は寛束ない」^(注十七)の
って、「西方浄土への架橋がそう容易にありえたとお思われぬ」とい
秋山虔氏の指摘は重い意味を持つだろう。

ところで、阿弥陀如来迎の際に、橋が象徴的意味を担っている場合があ
ったようである。平安中期以降、浄土教の盛行とともに貴族達による阿弥
陀堂の建立、阿弥陀像や来迎図などが多数作られ、特に藤原道長、頼通の
時代には大規模な浄土教建築や浄土庭園が華やかに造営された。道長の建
立した法成寺や頼通の平等院、鳥羽上皇の勝光明院、平泉の無量光院など
であり、浄瑠璃寺もその流れをくむ。とりわけ法成寺の華麗壮大なありさ
まは栄花物語に「ただ極楽もかくこそはと、思ひやりよそへられて」「お
むがく」、「浄土はかくこそはと見えたり」「(たまのうてな)」などと最大級
の賛辞をもって描き尽くされている。法成寺は諸堂造営整備の後、治安二
年(一〇三二)七月に寺号が定まるが、道長は万寿四年(一〇二七)十二月
四日、この阿弥陀堂で薨去した。極楽往生を願って念仏に専心し、九体阿
弥陀仏の手と糸で結び、枕を北にして西向きに臥して臨終を迎えたとは栄
花物語「つるのはやし」によって周知のところである。法成寺は、園池を
中央に、東側に薬師堂、西側に阿弥陀堂を配し、薬師と阿弥陀が池をはさ
んで向き合う構造になっていた。この園池については次のような指摘がな
される。「極楽国の中心は元来、宝池である。そしてもとより宝池を中心
にうつつされている阿弥陀浄土変と同じように、かの有名な法成寺の伽藍も
池を中心にして構成された」ということ^(注十八)で、池こそが極楽の中心的存在で
あり、シンボルなのだという。栄花物語の描くところでも、法成寺は池を
中心にその四方に御堂が建ち並んでいるのである。池には中の島があり、
「七宝の橋」が架かっている。久保朝孝氏の指摘に従えば、池の東に薬師

の浄瑠璃世界、西に阿弥陀の極楽世界が配置され、薬師による西への遣送、
阿弥陀による西からの来迎という極楽往生の機能を具現化した伽藍配置で
ある。池に架かった橋は東方薬師と西方阿弥陀とを結ぶ道、つまり来迎の
道の象徴と考えられる。

来迎と橋に関しては、天永二年(一一一一)頃に成ったとされる三善為
康の拾遺往生伝に次の話が載っている。

外記史生安倍為恒、字朝能は、延久年中に死去せり。これより先に或人夢み
らく、遠く西方を見れば、斜に一の橋を互せり。虹形は天に連り、雁齒は雲
に挿む。衆宝の莊嚴せること、敢へて言ふべからず。即ち夢の中に傍の人告
げて曰く、汝知るや否や。この橋はこれ史生朝能が、極楽に往生するの道な
り、云々といふ。その後三日にして、朝能入滅せり。衆の人の聞く者は、皆
決定往生と以為つ。^(注十九) (以下略)

安倍為恒は延久年間(一〇六九―一〇七四)に往生したというのが伝未詳であ
る。その死に先立ち、ある人が夢で遠く西方に向けて天に連なる虹形の橋
を見た。それは宝物で莊嚴されていた。傍らの人が言うには、この橋こそ
が為恒が極楽往生するのに渡る道なのだという。事実、その三日後に為恒
は死に、人々は極楽往生を疑わなかったという。橋を渡って浄土へ、とい
う構図が見て取れる。平安中期以降盛行した往生伝をみると、来迎、往生
の際に舟が関わることも多い。たとえば往生伝の祖、慶滋保胤の日本往生
極楽記には「蓮花の船」に乗って西方浄土へ向かったり(一八)、来迎の
時に「櫓の声」が響き「筏」が現れたり(二三)、「竜頭の舟」に乗って極
楽往生(二七)というように舟の描写がいくつも見受けられる。阿弥陀仏
は衆生をして生死の大海を渡らせ、彼岸に導くということから、舟は西方



写真 B



写真 A

写真 A: 「熊野観心十界曼荼羅図」
(三重県津市大円寺蔵)

写真 B: 同 (拡大)

写真 C: 練供養と来迎橋 (当麻寺)

写真 C

浄土への旅立ちには恰好の手段と考えられたのであろう。

来迎の橋の例は説話にもあまり見られないが、来迎図などにはその影響を見ることが出来る。江戸時代初期の作例ではあるが、三重県大円寺に伝来する熊野観心十界曼荼羅図では、画面下方に地獄、餓鬼等の六道世界を描き、上方にはアーチ形の橋が架かり、右手のたもとで赤子が産湯につかる様子に始まって、這い這いから幼児に成長して行き、虹形の架け橋を左方にたどりながら老年と死に至るまでの人の一生が、季節の推移と並行する形で左方の橋詰まで連続して描かれる。さらに下方六道世界とこの架け橋との間には阿弥陀仏を中心に聖衆来迎のさまが描かれている(写真A・B参照)。現世に生まれ落ちた人間が仏に見守られながら人生を送り、やがて死に臨んで阿弥陀仏の来迎を得て極楽往生を遂げるに至るこの虹形の橋は象徴的で意味深い。人は橋を渡って阿弥陀仏に救い取られるのである。これこそ先に拾遺往生伝で描かれた虹形の橋、極楽往生の橋であろうか。

来迎図と同様、極楽往生を描く仏教絵画に二河白道図がある。唐の善導が極楽往生を説くのに際して喩えた二河白道を絵画化したもので、我が国では鎌倉時代以後、多く制作された。上段に阿弥陀仏の極楽、下段に現世の娑婆世界、中段左方に人間の怒りを象徴する火の河、右方に貪欲の象徴である水の河を描き、両河の間に娑婆世界から極楽に向かって一筋の細く白い道が延びている。人は阿弥陀仏にすがることによって河に落ちずに浄土に迎え取られるということをドラマチックに描いたものである。二河にはさまれた白い道は、橋のイメージに重なるであろう。川中の道を渡って浄土に達するということからすれば、これも極楽往生の道に架かる橋とみなせるだろう。

一方、阿弥陀来迎を演劇仕立てで演ずる迎え講の法会においても、橋が

重要な役割を担う。迎え講は迎接会、来迎会とも呼ばれ、浄土教の重要な法会の一つである。法会に参加する人々が菩薩の面をかぶり、菩薩の装束を着て、阿弥陀仏が二十五菩薩を伴って衆生救済のために来迎するさまを劇として演ずるものである。往生要集の著者、恵心僧都源信が正暦年間（九九〇～九九五）に比叡山華台院で始めたのが原形とされる。その形式は一般に「極楽と娑婆になぞらえた二つの堂に懸橋を渡し、念仏者を守護する二十五菩薩がまず極楽堂から出現して娑婆堂に行き、臨終の念仏行者を蓮台に乗せて、極楽堂に帰る。行者が念仏の功德で阿弥陀如来に救い取られるさまを具体的に演じて、念仏信仰の勧めとする演劇性の濃い法会」とされる。平安時代以降広く行われ、現在でも源信の故郷、奈良当麻寺を始め京都泉涌寺の即成院、大阪大念仏寺など各所で行われている。当麻寺では練供養、正式には聖衆来迎練供養会式という名称で、五月十四日に営まれている（写真C参照）。同寺の案内資料には「寛弘二年（一〇〇二）^(マ)より始められたおよそ一千年の歴史を持つ伝統行事」とあるが、その起源を伝える確かな資料はない。現在使用されている菩薩面は古いものでも鎌倉時代の作とされ、当麻寺への信仰が盛んになるのも鎌倉時代以降とされるので、創始は寛弘年間ほどは古くないようである。この法会では、曼荼羅堂を西方極楽浄土に見立て、現世に見立てられた東方の娑婆堂まで百二十メートルにわたって来迎橋と呼ばれる懸橋を架け、観音、勢至以下二十五菩薩の面をかぶった講衆が中将姫を迎えに曼荼羅堂から娑婆堂に来迎し、そこで観音の持つ蓮台に中将姫の化身である阿弥陀像が乗せられ、聖衆は西方極楽浄土に帰って行く、という次第である。法会の重要な舞台である二堂を結ぶ懸橋が来迎橋と呼ばれてきたのであり、ここでも橋を渡って来迎があり、その橋を渡って極楽浄土へ往生するという構図が見据えられている。

るのである。

孝標女が当麻寺や都近辺で営まれた来迎会を見聞したかどうかは確認出来ない。ただ、来迎会自体は既に各所で行われていたわけだから、その舞台である来迎の橋のことを伝聞していたかもしれないが、これも不明というしかない。

四

以上、みてきたように、阿弥陀仏来迎に際しては橋が重要な役割を果たす場合が多いのである。橋は現世である此岸から、阿弥陀の浄土である彼岸へと往生者を渡してくれるものである。橋を渡れば極楽、という構図なのである。ところが、更級日記に立ち戻れば、作者は阿弥陀仏来迎の夢に接し、それが後生を「頼むこと一つ」であり、「この夢ばかりぞ後の頼み」と記すにもかかわらず、その後も「功德も作らずなどしてただよふ」晩年を過ごしていると告白する。作者にとって浄土への往生は、やはり見果てぬ夢、叶わぬ夢であるという諦念があったのではないだろうか。これには法成寺の焼失も影を落としているに違いない。法成寺の寺号が定められた治安二年に孝標女は十五歳、既に二年前に帰京し、前年には源氏物語全巻を通読している。法成寺を営む道長は源氏物語と縁のある人物である。阿弥陀浄土を再現したこの寺の話題は当然耳にしたであろう。その法成寺の伽藍が火災で焼亡したのは康平元年（一〇五八）二月、五十一歳の作者はこの年の十月に夫に死なれ、悲嘆と悔恨を日記に述べることになる。華麗な、極楽浄土世界をこの世に現出した法成寺の焼失に接した作者が、それに我が人生の崩壊を重ね合わせに見て、浄土そのもののはかなさを感じと

ったとしても不思議ではない。

人生の閉じ目が近づき、自分の来し方の総括にあたって、このあきらめにも似た思いが心に沈殿し、魂の原郷東国からの上京の旅を記すのに際し、橋を断ち、橋を敢えて渡らないという記述に向かわせたのではなかったか。断橋の風景は、阿弥陀浄土往生を望むべくもないことと感じとった孝標女の、あきらめにも似た心象の風景なのであろう。

注

一、更級日記の本文は、以下、日本古典文学全集（小学館）による。また、後出の蜻蛉日記、土佐日記も同全集による。

二、『更級日記』（新潮日本古典集成、新潮社）

三、片桐洋一『歌枕歌ことば辞典 増訂版』、笠間書院

四、『新編国歌大観 私家集編1』（角川書店）による。以下の増基法師集、頼政集、明日香井和歌集、江帥集、兼盛集、大江嘉言集も同書1および2による。また新古今集は同書『勅撰集編』による。

五、海道記以下、東関紀行、十六夜日記、うたたねの引用は新日本古典文学大系『中世日記紀行集』（岩波書店）による。

六、注三に同じ。

七、引用は新日本古典文学大系（岩波書店）による。

八、『橋と日本人』（岩波新書、岩波書店）

九、日本古典文学大系（岩波書店）による。

十、新日本古典文学大系（岩波書店）、頭注。以下の源氏物語本文も同大系による。

十一、本文は新編日本古典文学全集（小学館）による。

十二、伊藤守幸「三筋の葵・四本の柱―数量的厳密さをめぐって」、『更級日記

研究』、新典社）

十三、多田一臣『更級日記』上洛の記をめぐって―心の密室ということを中心―』（論集日記文学 日記文学の方法と展開、笠間書院）

十四、注二に同じ。

十五、『菅原孝標女論』（女流日記文学講座 第四巻、勉誠社）

十六、『更級日記』の薬師仏―構想を支える西方遣送の機能―』（源氏物語と平安文学 第1集、早稲田大学出版部）

十七、注二に同じ。

十八、『図説日本の仏教三 浄土教』（新潮社）

十九、引用は『往生伝 法華験記』（日本思想大系7、岩波書店）による。

二十、佐藤道子「儀礼にみる日本の仏教」、『日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅2』、朝日新聞社）

○大円寺蔵「熊野観心十界曼荼羅図」の使用に関しては、津市教育委員会文化課の松尾篤氏ならびに津市南河路自治会長、紀平正樹氏の恩恵に浴しました。記して感謝申し上げます。

（もとよし すずむ 文化創造学科）